

ユーザー事例紹介

「MicroGDS・Piranesi Forum'99」にてご講演頂いた事例をご紹介します。

MicroGDS にこだわったプレゼンテーション(実務事例)

株式会社丹下健三・都市・建築設計研究所 須藤 幸一郎 氏

日本を代表する建築家の一人である丹下健三氏の事務所、丹下健三・都市・建築設計研究所では、1987年にW/S版のGDSを導入し、5年前にMicroGDSに移行した。内外の大規模なコンペやプロジェクトを多く手がける同事務所では、MicroGDSがプレゼンテーションで威力を発揮しているとのことである。今回は、コンペ、プロポーザルの締め切り3日前に焦点を当てて、MicroGDSの利用方法をご講演して頂いた。



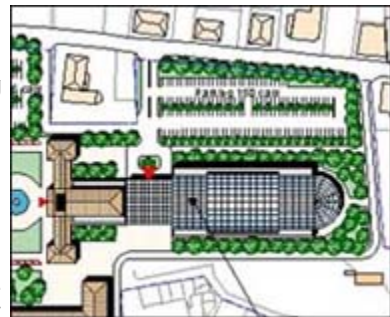
(株)丹下健三・都市・建築設計研究所
須藤 幸一郎氏

まず、コンペ、プロポーザルでの作業の流れは、次の様になっている。

コンペプロポーザルでの作業の流れ

① 都市作成(都市的スケールからのアプローチ)

まずプロジェクトのコンセプトを決め、広範囲に作成された模型(1/5000,1/2000)を使い、都市的スケールからのアプローチを行う。この段階でヴォリュームスタディーや法規的なチェックをし、何案かに絞り込む。



② 模型作成 スケッチ(建築的スケール)

次の段階としてスケッチや模型(1/500,1/200)を使ってデザインを検討し、最終案を決めCAD入力へと作業を進める。

③ CAD 入力

図面入力の前にCADの作業として、周辺模型作成のために読み込んだ地図をトレースし、ベクトルデータをおこす。サイトデータが手に入らない場合は、観光マップをトレースすることもあるが、MicroGDSはラスターデータを簡単に読み込めるため、下図作成後そのままサイトプランの周辺部分としても利用できる。

スケッチをCAD図面におこす時は、グリッドやコアなど全ての図面で共通のデータを最初に作り、その後全員でプランを入力する。エレベーションはCGや模型の指示書とプランをもとに作られ、エレベーションが完成した時点でセクション作成を行う。

④ レイアウト出力

レポートは図面以外全てPageMakerで作成し、図面はMicroGDSから出力する。タイトルブロックやフォントは完全に同じとはならないが、極力似せて作成している。プレゼン

ンボードは全て MicroGDS でレイアウトし、出力する。

このプレゼンボード作成にあたり、MicroGDS にこだわる理由として、以下の 3 点が挙げられる。

MicroGDS にこだわる理由

● カラー図面の作成

線種の濃度をパーセントで指定しパントーンのような表現が作れるため、カラー図面が容易に作成できる。塗り潰しの線種で作成された植栽などのデータを大量に配置する場合、画面上では正確に表示されていても、出力すると線画になってしまうというような問題があったが、Ver6.0 で印刷可能な塗り潰し図形の頂点数の上限が 29,000 点に増えたため、この問題は解決された。また、Ver6.0 より追加されたインスタンス機能を用いて図形を配置すると、データの変更もオリジナルデータを変更すれば、全ての図面に反映されるため、この機能が大変役立っている。

● ネットワークコラボレーション

1 枚の図面を複数のスタッフで作業することにより、常に均一な表現やデータの共有化が可能となる。また、エレベーションや寸法線のように図面によって表示・非表示を切り替えるデータは、包含リストを利用している。他の CAD にはないために、あまりクローズアップされていない機能ではあるが、W/S 版の GDS から利用しているユーザーには自然に使い、大変便利な機能である。

ここで模型作成について述べたい。模型作成は、エレベーション完成後に模型用レイヤを作成して man ファイルにおとし、包含リストにて非表示にしていたデータは、表示されてしまうため削除するなどの調整を行ってから、DWG ファイルへ出力する。模型作成業者には MicroGDS から直接出力した DWG データを渡すことができ、パーツのみを作成してもらい、スタッフが組み立てる。全て外注で作成した模型と、パーツのみ外注してスタッフが組み立てた模型を比べても、甲乙つけがたいほど精度の高いものが作られる。

● プレゼンボードの作成

他のソフトの画像やデータを取り込んだプレゼンテーションボードは、必ず MicroGDS で作成する。締め切り間際の変更や修正も珍しくなく、図面作成と色付けを異なったソフトで行ったり、図面をラスターライズして画像修正ソフトなどで図面を作成することは、最新情報との整合性がとりにくく、かなり危険でもあり、作業が無駄になる場合がある。その点 MicroGDS は、相互にレイヤを共有できるウインドウファイルを用いるため(MicroGDS Pro の cpj ファイルのみ)、全員が最新の図面を確認しながら作業が進めることが可能である。このことは、共同作業に不可欠な「チーム全体の時間感覚の統一化」を実現するうえで、大きな役割を果たしていると言える。また、他のソフトで作成したデータを読み込み、図面に色彩を付けることができるので、短時間で見栄えのする図面やプレゼンテーションボードが作成できる。海外物件の場合は、運送中のプレゼンテーションボードの破損を防ぐため、ドライマウントという方法でプレゼンテーションボードを作成する。ボード作成の際、図面を 1 枚の紙に打ち出す必要がある。MicroGDS のレイアウト機能を使用して出力すれば、容易に図面を作成できるため、この機能は高い評価を得ている。

締め切り3日前に、図面が何パーセントできているのか、完成までの作業量やそれにかかる時間、全体的に均一なレベルアップはどのくらいできるかなど、メンバー全員の時間認識は一致している必要がある。その点 MicroGDS は、色を付けながら図面を作成することにより、最終イメージを意識しながら作業でき、作業時間を明確に把握できる。結局1ヶ月のコンペも、2週間のコンペも、締め切り3日前から本格的に図面を作り込むため、作業する上で時間感覚の共有化が重要になり、そこを重要視した結果が、MicroGDS にこだわってプレゼンテーション資料を作成している理由とのことである。